子どものひとり、ひとりに、なまの人間としてふれること。

幼稚園の四月の出発点には、まずそれが必要だ。

ここにきたこの子どもとふれることなくしては、この子どもの教育はなされない。先生と子どもとの間に、何か中間物をいれて接していたのでは、その子どもの力になる教育は生まれてこない。

計画、月案、週案、日案、このこまかいこと、提出しなければならない書類、そういうものを中にはさんで子どもとふれたのでは、子どもは心を開いて語りかけてくれないだろう。子どもの心の中に、すばらしい力が湧き起こってきても、これを見、それに耳を傾ける目と耳が開いていなければ、それを伸ばすこともできないだろう。

やくそくごともである。それを中にはさんで、先生と子どもとふれたのでは、子どもの心にふれることはできない。せいぜい、そのやくそくを守ったか、守れないかというところで、子どもに接するだけである。よい子、わるい子の区別ができて、いいつけ口がひろがって……そのとき、子どもと子どもとの間の、生きたふれ合いもとまってしまう。

まず、子どもが心を開いてくれるように、保育室を自分の家の子ども部屋と同じように親しみを感じてくれるように、先生の心にふれてくれるように。

それには、教師は幼児との間に中間物をおいて接してはならないのである。

四月。幼稚園の新しい月。心をひきしめて、幼児と心を通わせ、幼児から学ぶ生活の第一歩をすすめてほしい。

幼児の教育　第六十七巻第四号

四月号　©　定価八〇円

昭和四十三年　三　月二十五日印刷
昭和四十三年　四　月　一　日発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所　凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします